

福田貴成氏の博士学位申請論文「両耳聴技法の形成 1810年代から1930年代にかけての聴覚性の変容について」は、「二つの耳で聞く」という人間にとって当たり前の営みが、19世紀から20世紀前半にかけてどのように意識化され、歴史的特殊性を帯びた「技法」として成立していったかを、理論と実践の絡み合いを通して、精密に考証しようとするものである。論文は目的・背景・先行研究を叙述した序章にはじまり、聴診器からステレオにいたる技術の進展と理論的深化を背景とした聴覚性の変容を第1章から第4章で論じ、最後に現代にまで通じるこの「技法」の広がりをもつ終章で構成されている。以下、章立てにしたがって内容を概観する。

第1章「片耳から両耳へ：聴診器の形態的変化と両耳聴認識」では、1816年にフランス人医師ラエネックによって開発された間接聴診法、すなわち聴診器による体内音の聴取という方法が、円筒に片耳を当てる原初的な形から1850年代に両耳による聴取という現行の形に進化していくさまが、当時の文献資料をもとに丹念に記述される。片耳から両耳へというこの移行は、外部からのノイズを排除することによって体内からの「完全な伝達」を実現することを目的としていた。両耳聴のメリットは量的なものでしかなく、単耳聴とのあいだに質的な差異は認識されていなかった、というのがこの章の帰結である。

第2章「『二つの耳で聞くこと』への問い：1830年代から1850年代にかけて」では、聴診器による両耳聴の実践が、同時に質的な問題として理論面で顕在化してくることが、物理学・生理学における研究の進展から明らかにされる。音の「物理」が必ずしも人の「聞こえ」と一致しないという事実の発見は、「刺激と感覚との根本的に恣意的な関係」を導き出し、感覚の「主観性」を露呈させることになる。

第3章「『音源定位装置』の発見：1880年前後(1)」は、こうして獲得された「聴覚の主観性」の認識が、両耳聴の音源定位能力の研究を通して、ふたたび「外部」との「客観的」なつながりを見出していく過程を扱っている。レイリー卿による音源の方向知覚に関する実験、その基盤となったヘルムホルツの感覚と知覚をつなぐ「無意識的推論」説などが綿密に検討され、「指示対象的錯覚」として構成される聴覚空間の様相が示される。外部空間の「客観的」把握と考えられたものが、実は外部刺激によってもたらされる主観的「音像」であるとする論の展開は、示唆に富んだスリリングなものであり、能動性と受動性の両者によって二重拘束される特異な「聴覚性」の姿を十分に浮かび上がらせている。

この外部からの操作可能性を受けて、第4章「両耳聴技法の形成：1880年前後(2)」では、1881年にパリで開催された国際電気博覧会における劇場中継システムと、それをめぐる言説がまず取り上げられる。電話回線を利用して両耳に受話器を当てることで実現したこの劇場中継は、固有の聴覚的質感をもたらしたと福田氏は分析する。第一の固有性は前章の「音像＝聴覚映像」につながる「可聴化された視覚性」であり、視覚的対象の不在にもかかわらず聴取者が体験した「パースペクティブ」、「イメージ」の問題が、ソシュールの記号学における「シニフィアン」概念との類比で論じられる。第二の固有性は「触覚的」特質であり、「レリーフ」という比喻で語られる音響の「固体性」である。リーグルとベンヤミンを援用して展開される「触覚性」についての論述は、前章までの緻密な議論に比べるとやや粗雑であり、媒質の振動である音響がもつ触覚的特質の必然性も指摘された。しかしながら、前章で検討された理論的な動向とほぼ無縁のところ、このような聴覚装置の実践が同時期に行われたことは、ひとつの「両耳聴技法」の成立を示すものであるとの指摘は、十分に説得力をもつものである。

終章の「或る『聴覚性』の散種」においては、こうして形成された「両耳聴技法」が、20世紀に入って技術的な裏付けのもとに一般に普及していくプロセスが、ステレオ・レコードの開発(1938年)とその市販(1958年)を通して語られる。「音源定位装置」としての両耳聴が生み出す「指示対象的錯覚」の経験は不特定多数によって共有され、新たな「リアリティ」の認識を広めていくことになる、という考察で本論は結ばれる。

審査委員との質疑応答では、科学史的記述に限定したことによる広がりへの乏しさ、とくに聴診器や電話中継によって聞こえてきた「音」についての言及が足りないことへの不満、第4章と終章のあいだの50年間の空白への疑念などが表明され、また精神分析やメディア論の成果を参照すべきだとの意見も出された。しかしこうした瑕疵は、福田氏が禁欲的なまでに対象を絞って厳密に議論を進めようとする真摯な態度ゆえに生じたものであり、「両耳聴技法」の成立過程を解明するという当初の目的は十全に達成されたと判断される。福田氏が行った聴くことをめぐる認識の変容プロセスの研究は、視覚に関するジョナサン・クレーリーの仕事に対応するものであり、現代社会で日常と化したヘッドフォン文化の淵源を明かし、聴覚メディアの将来についての展望を開くという意味でも、本論文の学術的意義はきわめて高いものと評価される。

したがって、本審査委員会は福田貴成氏の申請論文を、博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。